

NEWS LETTER

ファシリテーターの仲間が増えました

2015 年 5 月 30・31 日に福島県福島市、6 月 13・14 日に宮城県仙台市で、ファシリテーター（ボランティア）養成講座を開催しました。福島では 8 名、仙台では 18 名が受講し、これから子どものグリーフプログラムでファシリテーターとして子どもたちを支える仲間が増えました。

福島市では月に 1 回、仙台では月に 2 回、子どものグリーフプログラムを開催しています。プログラムには、子どもと一緒に遊び、子どもの「あのね」を受け止めるファシリテーターの存在は不可欠です。今回の養成講座で生まれた新しいファシリテーターとともに、これからますますグリーフサポートを充実させていきたいと思えます。今後、新たなファシリテーターが活躍していくことが楽しみです。



仙台会場



福島会場



仙台会場



福島会場



仙台会場

受講者の感想

全てが初めて聞くこと、学ぶことばかりでとてもためになった。

震災で私は大人から支えてもらったので、今度は私が子どもたちを支えたいと思った。

子どもとの接し方、子どもの世界へ寄り添うこと…。とても大切なことをたくさん学ぶことができました。

※仙台会場は子どもグリーフサポートステーションとあしなが育英会の共催、福島会場は子どもグリーフサポートステーション主催で開催しました。

米国ダギーセンターで研修を行いました

2015 年 6 月 21～22 日、米国オレゴン州にある「ダギーセンター」で、日本でグリーフサポートを行う団体向けの研修を行いました。ダギーセンターは、全米遺児遺族グリーフサポートセンターとして、肉親を失った子どもたちとその家族のサポートを行うほか、サポートを行う団体のトレーニング活動を国内外で実施しています。今回の研修は、日本国内から 14 名のグリーフサポート実践者が集まり、ダギーセンターの見学に加え、グリーフサポートの実践について学びました。参加者は、自身がグリーフサポートを実践するなかで抱えている疑問をぶつけたり、ダギーセンターのノウハウを教わったりして、今後の活動のヒントを得ていたようでした。

参加者は、同時期に開催された「19th Annual NAGC Symposium on Children's Grief」（全米の子どもグリーフサポート団体が集まり毎年開催されるシンポジウム）にも参加しました。

※研修主催：高橋聡美研究室 共催：子どもグリーフサポートステーション



▲ダギーセンター研修の様子

▼シンポジウムの様子



スタッフより

アメリカのオレゴン州ポートランドで、ダギーセンター研修および、子どもグリーフサポートのシンポジウムに参加してきました。シンポジウムは、全米で子どものグリーフサポート活動を行う団体が年に 1 回集まって開催されており、今年で 19 回目となります。400 人以上の参加者、60 ほどのワークショップが開催され、アメリカでのグリーフサポートの広がりや歴史を感じました。ダギーセンターでは「安心してグリーフを表現できる環境」の理想型を見ることができ、とても刺激を受けました。今回の訪問で、日本でもまだまだできることがある！と感じました。

各地のグリーフプログラムの様子

仙台、福島、岩手（陸前高田、釜石、宮古、盛岡）の各地で開催しているグリーフプログラムの、4月～6月の様子をお伝えします。

仙台

4月は進級や進学など環境が変化する月です。プログラムに参加する死別を経験した各家庭においても同様です。特に小学校や中学校へ進学をした家庭では、両親が揃った家庭の姿を目にする機会が多くなります。進級した子どもたちにおいても、新たな環境において改めて自己紹介を求められる機会もあるようで、苦勞を感じることもあるとの声を耳にします。5月から6月にかけては「母の日」や「父の日」の他、各学校において授業参観や運動会など家族が参加したり関わったりする行事が続きます。また、大型連休に伴い、出かけた先で両親の揃った家庭の姿を目にする機会の多い時期でもあります。親との死別を経験した子どもにとっては、気持ちがざわついたり、どこか落ち着かなかつたりする日々が続きます。そのため、この時期のグリーフプログラムにおいては、亡くなった方との思い出を辿り、気持ちに丁寧に触れ、繋がり直すことのできるようなワークを取り入れています。「春」をテーマにおしゃべりをしたり、亡くなったお父さんやお母さんについての思い出についてファシリテーターや子どもたち同士で話しをしたり、イラストやメッセージが描かれたシールなどを使ってのメッセージカード作りなどをしたりして過ごしました。

「春」は一般的にポジティブなイメージで語られることが多いものですが、必ずしもそうとは限りません。世間のポジティブな雰囲気故に、自分が感じているネガティブな気持ちについては語りにくい時期とも言えますが、子どもたちは、新しい環境での楽しみや不安、家族との思い出についてお話をしてくれました。死別したことやその家族についての話題やワークに、構えたり躊躇したりすることなく、それぞれのペースと方法で、丁寧に気持ちにふれながら取り組んでいる姿が印象的でした。

福島

子どもたちは、いつも通り、たくさんのおもちゃを存分に使い遊ぶ姿がみられました。4月に進級・進学にともなう環境の変化があったものの、子どもはいつもと変わらずたくさん遊ぶ様子を見せてくれました。一方、保護者の会では、春の環境の変化や、学校行事などによる、さまざまな気持ちの動きや心配事などについての話題があがりました。お話のほか、クラフトなどの手作業を取り入れ、おしゃべりしながら、時に作業に没頭しながら、ゆったりとした時間を過ごしました。

ゴールデンウィークには、福島プログラムに参加している家庭が仙台プログラムに参加しました。福島と仙台では、環境・人数・雰囲気異なるため、子どもや保護者は、いつものプログラムとはちょっと違った表現をしたり、他の地域の子ども・保護者と、さまざまな話をしたりすることができたようでした。

5月2日、県外家庭を対象とした「仙台ワンデイプログラム&お泊まり会」を開催しました。岩手県から2家庭、福島県からは1家庭が参加しました。子どもたちはファシリテーターと一緒に風呂に入ったり、就寝時間まで一緒に遊んだりして過ごしました。保護者の方々は、食事後ゆっくりとお風呂に入ったり、おしゃべりをしたりしながらのんびりと過ごしました。初めての試みでしたが、有意義な時間を提供することが出来たのではと思います。今後も宿泊を伴った様々なイベントや企画にチャレンジして参りたいと思います。

岩手

岩手県では、陸前高田市、釜石市、宮古市、盛岡市でグリーフプログラムを開催しています。（沿岸広域振興局保健福祉環境部等と共同開催、あしなが育英会協力）以下、地域ごとにご報告いたします。

陸前高田

陸前高田では、あしなが育英会により建設された陸前高田レインボーハウスにて、4～6月の期間に4回のプログラムを開催しました。

プログラムの会場が変わったこともあり、子どもたちのエネルギーや表現が今までと異なることを感じる一方で、昨年度までのように、子どもたちは空間を選び、亡くした大切な人や失ってしまった大切な何かについて、その子のペースでお話したりする姿が見られました。プログラムに初めて参加してくれる子どももいましたが、すぐに場に慣れ、何気ない会話の中から亡くなった大切な人について教えてくれる場面もありました。

その他、あしなが育英会主催のプログラム（震災遺児対象）へのお手伝いもさせていただきます。今後も協力して子どもたちを支えていけたらと思います。

陸前高田市では、2014年10月に初めて災害公営住宅の入居が始まり、その後、数か所で入居が始まっています。住民の方々の生活環境やコミュニティが変わり、孤立などの問題が起こってきております。まだまだ変化が続き、落ち着いた日々が続く中で、疲れも見えてくるように思われます。

子どもたちが安全安心を感じながら、子どもたちが日常の疲れを落とし、子どもらしく過ごすことのできる場を地域で創っていかれたらと思います。

釜石

釜石では、釜石地区合同庁舎をお借りして、5月にプログラムを1回開催しました。

昨年度同様、子どもたちはエネルギーが高く、一日中走りまわっているような子もいました。抱えている不安を言葉にして教えてくれることもありました。

釜石では中高生のプログラムも開催しており、5月に1回開催しました。学校生活のことや、将来どこで生活するのかなど、様々なお話をしました。これからも、子どもたちの声に寄り添える空間を地域で創っていかれたらと思います。



宮古

宮古では、宮古地区合同庁舎をお借りして、6月にプログラムを1回開催しました。

子どもたちはその時その時に様々な遊びを選び、思い思いに過ごしている様子でした。亡くなった大切な人について、今までお話をしたことがなかった子が、亡くなった人へメッセージカードを書く姿もありました。遊びながら、人間のフィギュアを使って「死んじゃった」という表現をすることなどもありました。

子どもたちはプログラムを重ねる中で、話してもいいということ、ひとりじゃないということを理解してきています。また、成長していく中で、言語化する力を得ていること、失くした人やものに対する実感が伴ってきていると感じます。これからも子どもたちの成長に寄り添う場を地域で創っていかれたらと思います。

陸前高田、釜石、宮古と岩手県沿岸部3か所でプログラムを開催しておりますが、それぞれの地域で状況が全く異なっており、地域の文化・雰囲気なども違います。そのことを理解し寄り添うということは、「何を失ったか」という悼みや、「その地で生活する人たちの今」に寄り添うことでもあると思います。

地域のなかで人々の格差が広がっていますが、これからますます喪失感は大きくなり、また、問題は個別・繊細化していくと思われるため、それぞれの悼みや今に寄り添う必要があるように思います。また、子どもは成長に伴う課題も見えてきているため、これからも地域や生活に寄り添いながら、子どもたちの声を大事にする場を創っていかれたらと思います。



佐藤 利憲 (さとう よしのり)

子どもグリーフサポートステーション理事/
プログラムディレクター

『仙台で子どものグリーフをサポートする場を作りたい！』

このような思いで仲間たちと始めた仙台でのグリーフサポートも、4年半が経過しました。サポートプログラムを開始してから3か月後に東日本大震災が起これ、無我夢中で駆け抜けてきた4年半だったように思います。

この間、様々な方との出会いがあり、地域の皆様やボランティアの方々に支えられ、ご理解・ご協力をいただきながら、参加する子どもたちや家族と共にグリーフサポートの場を作ってきました。いまでは、安心してそれぞれの気持ちや思いを表現し、語ることでできる安全な場所へと成長しています。

大切な人を亡くすということは、とても大きな出来事です。これは子どもにとっても同じこと。悲しみや苦しみ、辛さ、寂しさといった感情や、会いたい、触れたい、感じたいといった思いを抱くこともあります。これがグリーフ＝大切な人を亡くしたときの自然なところの反応です。100人いれば100通りのグリーフがあり、一人ひとり異なるものです。そして、グリーフは時間の経過とともになくなるもので

はなく、日々揺れ動いています。わたしたちのプログラムに参加している子どもたちも大切な人を亡くし、様々なグリーフを抱えながら生活しています。ときには悲しい表情を浮かべることもあります。ときには涙を流すこともあります。楽しく遊ぶことも、笑うことも、喧嘩することもあります。これらは子どもたち一人ひとりのグリーフのプロセスであり、それぞれが自身の体験に向き合い、受け入れ、適応する子どもたちもつ本来の力なのです。

これからも子どもたちのグリーフやそのプロセスを感じながら、子どもたちのこころを丁寧に扱い、強さを信じ、弱さを受け止め、安心してそれぞれのグリーフを表現できる安全な環境を作っていきたいと思います。

私は、子どものグリーフサポートは、子ども支援・子育て支援であると思っています。決して、1～2年で終わるものではありません。子どもたちが社会に適応し、自分らしく生きていけるように、子どもと家族とともに将来を考え、ともに歩み、10年後、20年後をイメージしながら、いまを生きる子どもを中長期的にサポートしていきたいと思っています。

東日本大震災を経験した我が国に、大切な人を亡くした子どもたちが、将来に夢や希望を持ち続け、自分らしく生き、人生をしっかり歩んでいけるような支援体制を、これからも地域の皆様とともに作っていきたくと思っています。

お知らせ

ご参加お待ちしております！

大切な人を亡くした子ども・保護者の方へ

なつやすみ工作教室

- ◆日程：2015年8月8日（土） ◆会場：仙台レインボーハウス
- ◆対象：大切な人を亡くした子どもと保護者（死因や時期は問いません。お子様は未就学児・小学生～高校生が参加できます。）
- ◆内容：スノードームづくり（協力・講師：特定非営利活動法人 Switch 理事長 高橋由佳さん）
工作教室（協力・講師：三菱電機株式会社）
- ◆詳細は子どもグリーフサポートステーションまで。

なつやすみ宿題会

- ◆日程：2015年8月13日（木） ◆会場：仙台レインボーハウス
- ◆対象：大切な人を亡くした子どもと保護者（死因や時期は問いません。お子様は小学生～高校生が参加できます。）
- ◆持ち物：宿題を持ってきてください。
- ◆詳細は子どもグリーフサポートステーションまで。

一般の方へ

富山ファシリテーター養成講座

- ◆日程：2015年8月8日（土）9日（日）※2日間の受講が必須
- ◆時間：10:00～16:00（両日とも） ◆定員：15名
- ◆会場：高岡市男女平等推進センター会議室
（ウイング・ウイング高岡6階）
- ◆参加費：無料（テキスト1,800円を購入し、ご持参ください）
- ◆参加方法：電話・メールにてお申込ください。
※申込締切：8月1日（定員に達し次第締切）
- ◆主催：防衛医科大学校医学教育部看護学科 高橋聡美研究室
NPO 法人子どもグリーフサポートステーション
共催：仙台青葉学院短期大学 佐藤利憲研究室
- ◆詳細はホームページをご覧ください
<http://www.cgss.jp/2541/>

いずれもお問合せ・お申込みは

電話：022-796-2710 メール：info@cgss.jp まで。

プログラム 予定

7月	8月
4日（土） 仙台・福島・陸前高田	1日（土） 仙台・陸前高田
18日（土） 仙台・陸前高田	8日（土） 宮古
21日（土） 仙台高校生	22日（土） 仙台・陸前高田
25日（土） 福島・盛岡	25日（土） 仙台高校生
	29日（土） 福島

大切な人を亡くした子どもと保護者の方はグリーフプログラムにご参加いただけます。子どもグリーフサポートステーションまでお問合せください。詳細な資料を用意しています。

全国の
グリーンサポートを
知りたい!

INTERVIEW インタビュー

グリーンサポートせたがや (東京都)



現在、日本各地で子どものグリーンサポートを行う団体が活動しています。そのひとつが、2012年に生まれた「グリーンサポートせたがや」。現在では東京都世田谷区に、活動の拠点となる「サポコハウス」を構え、様々なグリーンサポートプログラムを行っています。

グリーンサポートせたがやは、どのようにして活動を開始し、どのように子どものグリーンサポートを行っているのでしょうか。今回はグリーンサポートせたがやメンバーの松本真紀子さんと川染京さんにお話を伺いました。



ーグリーンサポートせたがやはどのようにして誕生したのですか。

メンバーの一人が2012年8月に、アメリカの「ダギーセンター」研修ツアーを企画したことがきっかけです。ダギーセンターは死別を経験した子どものサポートをアメリカで先進的に行っている場所です。死別を経験した子どものサポートの場を実際に見て、「自分たちの地域にもこんな場所があるといいね」と参加者みんなで話していました。それから帰国し、東京に住んでいた4人の参加者がそれぞれ友人に声をかけて集まり、実現に向けて話し合いを始めました。

まず最初に行ったのは、地域社会で「グリーン」について学べる機会を作るために連続講座を開こうと、活動資金を得るための助成金の申請でした。助成金を申請するには、団体名や活動内容を決める必要があったので、「団体名はどうしようか?」「どんなことをしようか?」と、どんどん話し合いが進んでいきました。幸い、助成金の申請が通り、世田谷区でグリーンについて「哀しみに寄りそいともに生きる」というテーマの連続講座を2013年9月から全6回開催しました。連続講座では、グリーンに関する様々な経歴を持つ講師の方々を招き、グリーンの存在やグリーンサポートの大切さについてお話をしていただきました。また、世田谷区でグリーンサポートを始めるために、場所とお金が必要であることも発信していきました。参加できなかった方にも連続講座の内容を伝えたいと考え、本として発行しています。

ー現在のサポコハウスで活動が行われるようになるまでに、どのような経緯があったのでしょうか。

ダギーセンターは当初、個人宅のガレージでサポートの場を始めたと聞いていたので、私たちも、もし活動場所が見つからなければ誰かの家のリビングを使おうと冗談交じりに話していました。しかし運良く、2013年に、世田谷区で行われた「世田谷らしい空き家等の地域貢献活用モデル事業」に選ばれ、世田谷区太子堂にグリーンサポートスペース「サポコハウス」をオープンすることができました。家賃がかかるので財政的に厳しいですが、助成金でなんとかしのいでいます。

そうして場所を確保し、2014年のゴールデンウィークにはサポコハウスで初のファシリテーター養成講座を開催し、7月から子どもと大人のサポートプログラムを開始しました。2014年10月には「世田谷区グリーンケアモデル事業」の実施事業者として選ばれ、個別相談の初回を無料で受けることができるようになりました。現在はパートナー死別ピアサポートプログラムも開始しており、大切な人と死別した人がサポートにつながるための様々なチャンネルをつくっています。

ーどうしてここまで活動がうまくまわっているのでしょうか。

多様なメンバーが、それぞれの力を発揮できたことが大きいと思います。はじめは10名足らずでしたが、メンバーがメンバーを呼び、現在は20名ほどになりました。全員がボランティアです。年齢は20代~70代と幅広く、職業やバックグラウンドも様々ですし、色々な得意分野やスキルを持った人たちが集まっています。世田谷区の空き家等地域貢献活用事業に応募する際には、地域活動に長年関わってきたメンバーが応募資料作成のアドバイスをくれましたし、世田谷区長に活動の説明をするために訪問する際には、区議会議員のメンバーが機会をつくってくれました。現在20名という多人数のメンバーで団体を運営できているのは、組織運営の経験豊富なメンバーが上下関係や力関係を作らず、お互いを支え合う組織づくりを示してくれたからです。このように様々なスキルを持ったメンバーがいますが、グリーンについて専門的な教育を受けた「エキスパート」は私たちの団体には一人もいません。それでも、必要なときには子どもグリーンサポートステーションをはじめ、他の団体や個人に講師を依頼するなどしてカバーしています。人に頼りながらやっていくのもいいことだと思います。「やれる人がやれることをやろうね」が、私たちの団体のモットーです。

ーこれからのサポコハウスの展望は。

関わる人がフレキシブルに使えるような場所になっていったらいいと思います。

ーありがとうございました。

グリーンサポートせたがやホームページ <http://sapoko.org>

ご寄付のお願い

大切な人を亡くした子どものためのサポートのために、皆様からのご支援が必要です。いただいたご寄付は、大切な人を亡くした子どものための活動に使われます。温かいご支援をお待ちしております。

ご寄付の方法

振込払いにてお願いいたします。

七十七銀行 南町通支店
普通 5493790
NPO 法人 子どもグリーンサポートステーション
理事 西田正弘

※寄付をされた方のお名前・ご住所・ご連絡先を、電話やメール等でお知らせいただけますようお願いいたします。
※領収書の送付を希望される方は、お申し付けください。

NPO 法人子どもグリーンサポートステーション

☎ 022-796-2710 FAX 022-774-1612

✉ info@cgss.jp

住所 〒980-0022
宮城県仙台市青葉区五橋 2-1-15
仙台レインボーハウス内

WEB <http://www.cgss.jp/>